

読 響

Yomiuri
Nippon
Symphony
Orchestra

PFITZNER: Von Deutscher Seele op. 28 (Japan Premiere)
Conductor SEBASTIAN WEIGLE
Soprano MAGDALENA HINTERDOBLER Mezzo Soprano CLAUDIA MAHNKE
Tenor STEPHAN RÜGAMER Bass FALK STRUCKMANN
Chorus New National Theatre Chorus (Chorusmaster KYOHEI TOMIHIRA)
YNSO Subscription Concert No. 654
Tue. 20 Jan. 2026, 19:00 / Suntory Hall

「ドイツ精神について」

題名を恐れるな
そこはナイーブな夜の世界
郷愁と孤独の涙を拭いて
そつと歌に耳を澄まそう
星々のハーモニーを聴けば
もう大丈夫
その翼で永遠の空へ

—— 人間と自然を讃えた美しい詩と劇的な音楽が、温かな感動を呼ぶ ——



プフィッツナー：カンタータ「ドイツ精神について」 作品28(日本初演)

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) ソプラノ＝マグダレーナ・ヒンタードブラー メゾ・ソプラノ＝クラウディア・マーンケ

テノール＝シュテファン・リュウガマー バス＝ファルク・シュトルックマン 合唱＝新国立劇場合唱団(合唱指揮＝富平恭平) ※当初の発表から、出演者が一部変更になりました。

読売日本交響楽団 第654回 定期演奏会 2026 1.20<火>19:00 サントリーホール S¥11,000 A¥8,800 B¥6,800 C¥5,800 読響チケットセンター 0570-00-4390(10時-18時・年中無休/12/29～1/3を除く)

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
助成：公益財団法人アフィニス文化財団、公益財団法人花王 芸術・科学財団、公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団 協力：アフラック生命保険株式会社

PFITZNER Von deutscher Seele

プフィッツナーが自らの理想を求めて書いた 渾身の大作「ドイツ精神について」が、今に蘇る。

現在、ドイツの名匠ヴァイグレが読響の常任指揮者に就任して7シーズンを迎えている。これまでドイツの後期ロマン派や近現代の作品を多く取り上げ、高い評価を得てきた。R.シュトラウス「エレクトラ」、ベルク「ヴォツェック」、アイスラー「ドイツ交響曲」などで絶賛され、一つの黄金期を迎えていると言えるだろう。1月《定期》では、ハンス・プフィッツナー(1869-1949)による大作カンタータ「ドイツ精神について」を日本初演する。今シーズンの「目玉」となる公演だ。

多彩な新しい音楽が生れた20世紀初頭のドイツにあって、プフィッツナーは保守的な立場を貫き、「最後のロマン主義者」とも言われた。彼が1922年に作曲したのが4人の独唱、合唱、オルガン、管弦楽による100分もの大作「ドイツ精神について」だ。プフィッツナーは、ドイツ後期ロマン派の詩人ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ(1788-1857)の詩を用いた。メンデルスゾーン、シューマン、ブラームス、ヴォルフら作曲家によるドイツ・リート(ドイツ歌曲)の歴史においてもアイヒェンドルフの存在は重要な位置を占めており、プフィッツナーにとってお気に入りの詩人だった。この曲は、「人間と自然」「人生と歌」「歌の部」の三つの部分からなり、夜、旅、孤独、死といったロマン派的なテーマに迫り、自然への憧憬などを描いた美しいものだ。プフィッツナーは大胆な構成やオーケストレーションにより、詩と寄り添いながらファンタジーに満ちた音楽を書きあげた。この曲には、作曲家が付けたタイトルにより、多くの誤解や論争を生み、作品自体も正しく評価されてこなかったという一面がある。ヴァイグレは「アイヒェンドルフの詩は、普遍的な美を称揚するロマンティックなもので、政治的な要素はありません。リートの形式を踏襲しつつ洗練された和声を用いて甘美な旋律を生み出しました。純粋に音楽に耳を傾けてほしい」と語っている。

この公演は、音楽という芸術の意味を思考し、論争を繰り広げたプフィッツナーが、どんな音楽で自らの理想に迫ったのかを知る良い機会になるだろう。それは、一人の作曲家が歴史を踏まえて世界と対峙し、自らのアイデンティティを追求する姿を見つめることになる。現在の私たちが、芸術と社会の関係性を考える上でも価値ある公演となるだろう。ヴァイグレ&読響、世界のオペラハウスで活躍しドイツ・リートも得意とする4人の歌手、日本で数々の声楽曲に取り組んできた新国立劇場合唱団が、この作品からどのようなメッセージを今に伝えてくれるのか、大いに期待したい。



セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)

2019年4月から読響第10代常任指揮者を務めるドイツの名匠。ベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、指揮者に転身。バルセロナのリセウ大劇場とフランクフルト歌劇場の音楽総監督として手腕を發揮し、高い評価を得た。バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、英国ロイヤル・オペラ、ベルリン・フィル、ウィーン響、ベルリン放送響などで活躍している。権威あるドイツの専門誌「オーパングェルト」の年間最優秀指揮者などを受賞。24年10月には読響の欧州ツアーを成功に導いた。



マグダレーナ・ヒンタードブラー(ソプラノ)

伸びやかで澄んだ美声を持つ歌姫。フランクフルト歌劇場の専属歌手を務め、ワーグナーやR.シュトラウスの主要な役で絶賛されている。ベルリン・ドイツ・オペラ、ライプツィヒ歌劇場、ケルン歌劇場などに出演。ドイツ・リートでも高い評価を得ている。今回、読響に初登場する。



クラウディア・マーンケ(メゾ・ソプラノ)

世界的に活躍しているドイツを代表するメゾ。フランクフルト歌劇場の専属歌手を務め、フランクフルト市から“宮廷歌手”の称号を贈られた。ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、バイロイト音楽祭などで歌い、好評を博している。



シュテファン・リュウガマー(テノール)

ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭など世界の舞台で活躍する俊英。ベルリン国立歌劇場を中心に、ミラノ・スカラ座、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座などに出演。プーゼス、ドホナーニ、ギーレン、ラトル、メータら名匠の指揮で世界各地の楽団と共演している。



ファルク・シュトルックマン(バス)

現代最高峰バス・バリトンの巨匠。パレンボイム、ディーレマン、アバド、ムーティ、ベレンコラの指揮でメトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラなどで歌い、数々の名演奏を残している。ウィーンとベルリン、二つの国立歌劇場の“宮廷歌手”の称号を持つ。

新国立劇場合唱団(合唱/合唱指揮=富平恭平)

読響「第九」で毎年共演を続けている日本を代表するプロ合唱団。新国立劇場で行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を展開し、高い評価を得ている。2023年10月にはヴァイグレ指揮のアイスラー「ドイツ交響曲」で読響と共演し、絶賛された。

読響日本交響楽団 第654回 定期演奏会

2026年1月20日(火)19時開演

サントリーホール

東京都港区赤坂1-13-1 Tel. 03-3505-1001

S ¥11,000/A ¥8,800/B ~~6,800~~ OUT/C ~~5,800~~ OUT

●東京メトロ南北線「六本木一丁目」駅(3番出口)より徒歩約5分 ●東京メトロ銀座線「溜池山王」駅(13番出口)より徒歩約7分

学生券 学生の方は、開演15分前に残席がある場合、¥2,000で入場できます(要学生証/25歳以下)。ただし席を選ぶことはできません。開演1時間前から受付で整理券を配布します。

■都合により曲目、出演者等が一部変更される場合もございます。 ■ご購入いただいたチケットは、公演が中止になった場合以外でのキャンセル・払い戻しはできません。あらかじめご了承ください。

■未就学児のご入場は、固くお断りいたします。 ■読響ホームページ <https://yomikyo.or.jp/>

読響チケットセンター 0570-00-4390

*10時~18時・年中無休/12/29~1/3を除く

読響チケットWEB <https://yomikyo.pia.jp/>

*座席選択可/チケット郵送料無料

プレイガイド

サントリーホールチケットセンター 0570-55-0017

